

コネクショニズムと唯識論の比較

市村 碧斗

私は昔から人間の心がどのようにして出来たか、どのような仕組みになっているのか興味を持ち、そのヒントとなる考え方を模索する中でただ心のみがあるという唯識論に興味を持った。一方で、TVでの報道や書籍を通し、世間では脳こそが心であるといった考え方が主流となっているのを感じていた。そこで、哲学の知見を紐解くと、心の哲学なる領域が存在し、脳など物的な存在が心であるという考え方や心と物的なものの二つが心であるという考え方が議論されていることを知った。更に、脳神経科学にヒントを得たコネクショニズムという考え方が台頭していることも知った。そこで、科学の立場をとったコネクショニズムの考え方や仏教の立場をとった唯識論を比較することで、人の認知の仕方に対して新たな切り口や知見がみつかるのではないかと考えた。

本研究は、コネクショニズムと唯識論の比較・検討を行い、唯識論から人間の認知を説明する利点を挙げることを目的としている。コネクショニズムも唯識論も共に心の仕組みや人間の認知の仕組みについて言及している。それらの説明の中には、心的表象と言語表象に関する議論も含まれる。本研究では言語表象についての説明を切り口に両者の類似点・相違点を検討し、コネクショニズムによって唯識論を解釈する可能性を示した。その後、人間の認知の仕組みについて唯識論の立場から論じる利点を挙げた。

そのために、まず先行研究を参照しながら、心の哲学における物的一元論、心物二元論、心的一元論の概要、次に心の哲学とコネクショニズムの関係、そして最後に唯識論の概要をまとめた。

以上のことを行った上で、コネクショニズムも唯識論も両者共、分散表象に注目していることや言語の認知の仕方について感覚を通して得た身体性を重要視していること、また「外界」という存在を設定し人間の認知の仕組みについて言及していることを指摘した。そして、人間の認知活動における「外界との関わり」の重要性について述べ、唯識論はその関わりが非常に「能動的」であることを主張した。その後、人間の外界と能動的に関わっていく姿勢に着目することは、人間がどのように認知しているのか突き止めるために重要なファクターであることを示唆した。

(指導教員 横山幹子)